

# 大坂堂島米会所における米価形成<sup>\*1</sup>

## - 相場報知状の検討をとおして -

加藤 慶一郎

はじめに

第1節 相場報知状について

第2節 嘉永6・安政1年の米価形成過程の実態

1 米価の推移

2 米価形成の実態

！ 嘉永6年1～5月：米価安定期

" 嘉永6年6～10月：高騰期

# 嘉永6年11～安政1年2月：高騰期

\$ 安政1年3～8月：高騰期

おわりに

はじめに

江戸時代において、米価は諸物価を基礎づけるという意味で、最大の重要性をもつ商品であった<sup>\*2</sup>。米価形成のあり方は、単に米穀流通だけに作用するものではなく、商品流通全体にもその影響は及ぶものである。とりわけ、大坂を集散地とする遠隔地商業は、資本の環流期間が長いと、価格の不安定化はそこで商品流通を阻害する。よって、このことは大坂市場の相対的衰退と決して無関係とはいえない。この意味でも、米価形成は大きな意味をもつものであった。

実際、幕末期において価格を安定させることは商品流通上の重要課題となっていた。このことは、天保13(1842)年に大坂町奉行所の能吏内山彦次郎が調査し、まとめたところの「諸色取締之儀二付奉伺候書付」に端的に示されている<sup>\*3</sup>。その前文の記述内容を見ると<sup>\*4</sup>、流通量が減少していないにもかかわらず「諸国相場之元方」である大坂商品価格が高騰しているのは、「貪利奸計之族」のためであるとする。そして、それまで大坂でなされた商品集散が各地に分散したため「不融通故高価」となり、ついには「平準之直段」が喪失されるに至ったとの指摘が見られる。この理由づけの当否はともかくとして、単なる物価引き下げでなく、その安定に対し関心が高かったことがわかる。そこで注目されるのが、この前文に続く「諸家領分知行所産物之事」以下の24項目である。諸商品それぞれについて、その流通上の問題への対策が提示されている。そのほとんどの場合が、「……然上は平準之直段二可相成筋と奉存」という形式でしめくくられている。こうした文言がくりかえされるところに、調査目的の根底に価格安定化があったことがうかがえるのである。

こうした大坂町奉行所の姿勢は、米市場政策にも如実にあらわれている。この「平準之直段」要請は、天保4(1833)年にはじまるといってよい\*<sup>5</sup>。奉行所からの要請はその後急増することとなり、天保4年から慶応1(1865)年までの約30年間で30回をかぞえるに至った\*<sup>6</sup>。内容的には、都市住民向け飯米確保という社会政策的な意味合いもあるが、それとともに市場振興政策的側面を看取することができる\*<sup>7</sup>。すなわち、過度の価格変動を抑制することで諸国との取引を増加させ、大坂商業の衰微傾向を克服しようとの意図が込められていたのである\*<sup>8</sup>。見方をかえれば、このことは天保期以降に生じた価格乱高下が大坂市場にとっていかに打撃となったかを示すものといえる。

以下では、嘉永6~安政1年の市況に関するある史料を基礎資料として、両年においてどのような過程のなかで価格変化が生じていたのか、という点を検討したい\*<sup>9</sup>。この両年が選ばれたのは、もっぱら史料的制約による。しかし、この時期はまさに大坂市場の動揺期でもある。ゆえに、その間の事情を知るうえで有益な関連情報が得られるであろう。そこで、まず第1節では、基礎史料である相場報知状の内容紹介を行なう\*<sup>10</sup>。これは、大坂をはじめとする各地の情報を集約し、大坂で作成され流通したものと推測される。内容的には、価格情報だけでなく需給の動向も示されている。これを情報源とすることで、日々の大坂米価の動きと、その背後の事情を読み取ることができる。続く第2節では、この相場報知状を素材として、価格形成過程の実態に検討を加える。

## 第1節 相場報知状について

本節では、相場報知状の内容について検討する。ここで利用したのは、大坂から尾道商人橋本吉兵衛家へ送られたのち、同家で「大坂相場写」との表題で一冊の帳簿として保存されたものである\*<sup>11</sup>。残存しているのは、嘉永6年1~12月分と、翌安政1年1~8月分である。よって、先述のとおり本論文の検討は、この両年に限定されることになった。尾道の橋本家がこうした情報を入手していたのは、当家が灰屋の屋号をもって金融業や塩田を営んでいたことのほか、より重要なのは尾道で出雲藩蔵米売却にあっていたことであろう。払米を有利に運ぶうえで、相場報知状による情報収集が不可欠であったと推察されるのである\*<sup>12</sup>。

まずは記載形式確認のため、嘉永6年1月30日大坂発信分を掲げることにしよう\*<sup>13</sup>。

正月卅日出し  
筑前米 八拾五匁六分  
ヒ後米 九拾貳匁  
……(中略)……  
出雲米 六拾六匁五分  
岡大豆 九拾三匁三分  
金 六拾三匁三分五厘  
銭 九匁五分五厘  
筑前帳合 八拾三匁三分五厘四分

五六分七分五厘 六分  
同正米 八拾五匁五六分  
六七分  
引方 五匁五六分  
肥後米 九拾壹匁九分貳匁  
貳匁又壹分  
引方 貳匁又壹分  
三月切筑前京 八拾五匁五分  
堺 八拾六匁壹分

一米之儀江戸廿貳日出、先状各同様人気不進申来り、大津沢米八拾六匁三分、兵庫不人気庄内八拾七八匁不捌相聞へ、帖合同時二立会候所、諸方注文口かい手入札無少、正米少々宛買人有之引直り、連て帳合素人方買注文手堅仕候、雨天続出来休当月在米見込違うり退キ相聞へ、場うり人気又八正米立直り八、東海道筋差直売進注文有之、正帳むさと進かね申候

子二月四日着

冒頭には、筑前米をはじめ30ある当時の主要銘柄のうち10ほどについて、その大坂価格があげられている<sup>\*14</sup>。金・銭相場をはさんで、堂島米会所での正米・帳合米価格が掲出されている。これらについては、その日の取引開始からの推移が逐一しるされている。新穀供給期には、情報量が増加し、諸藩蔵屋敷払米量・価格も掲載された。大坂諸米価につづき、各地米価がごく簡単な市況とともに付された。引用部分では、江戸・大津・兵庫・京・堺だけであるが、ほか地方もしばしば見られた。末尾に、大坂の取引状況やそのほかの情報に詳細に記載されている<sup>\*15</sup>。ここにあげた分では、東海道筋からの注文が記録されている。これを見ると、堂島での取引が各地からの注文によって構成されていたことなどもわかる<sup>\*16</sup>。この末尾の記述が、のちに米価の短期変動要因を考察する際の、きわめて有益な検討素材となるのである。

相場報知状を大坂から発信したのは、状屋米飛脚と呼ばれる業者であったと思われる<sup>\*17</sup>。その発信回数はかなり多かった。表1は、この点を見るため用意したものである。あわせて、大坂米価に付されていた地方米価の記載回数もあげている。相場報知状は、当然のことながら、大坂相場は常時しるされている。報知回数は、嘉永6年が124回、安政1年1~8月においては60回であった。発信と着信の間隔を見ると、たいてい3日ほどで尾道に着いている。堂島米会所の休日が年100~110日、取引日は年250~260日であったゆえ<sup>\*18</sup>、その頻度は平均2日に1度となる。だが、それは1年を通じ均一ではなく、流通上の節目にあたる端境期から新穀供給期に集中する傾向があった。すなわち、嘉永6年では2~3月と8月および10~12月、安政1年も2月と閏7月が多い。各地米価をみると、江戸のほかでは大津・京・堺・兵庫といった大坂近接地域が中心であった<sup>\*19</sup>。そのほか、数はかなり限られるが、越後や尾張から下関・肥前にわたる遠隔地の米価もある。これらも、やはり端境期から新穀供給期にかけて増える傾向がある。とはいっても、各地米価の構成は兩年を通じ同じではない。たとえば、京と堺は、嘉永6年にくらべ安政1年は激減しているが、その

一方で兵庫はほぼ同水準を維持している。各地の動向を踏まえ、その重要度に応じ一定の取捨選択が適宜なされていたのであろう。

## 第2節 嘉永6・安政1年の米価形成過程の実態

本節では、相場報知状に主に基づき、嘉永6年と同7年の価格形成過程の実態に接近することにしたい。

### 1 米価の推移

そこで、あらかじめ両年の米価を確認しておくことにしよう。先述のとおり、相場報知状は安政1年8月までしか収録されていない。それにもかかわらず検討対象としたのは、このことで嘉永6年秋にはじまる収穫年を通観できることと、これまであまり利用されてこなかったこの種の史料をできるだけ活用したいと考えたためである。図1には、正米の価格と帳合米の価格を示している。さしあたり前者によってその動向をみることにしよう<sup>\*20</sup>。まず、嘉永6年1～5月上旬まで1石あたり銀85匁ほどの水準で安定的に推移している。その後の時期において、かなり明瞭な3つの波動が生起している。第1のそれは、嘉永6年7月の急騰にはじまる。ひと月たらずの間に、1石あたり85匁程度の水準から110匁近くへと、20%以上の上昇率をみせた。ところが、早くも8月には反落することとなった。上昇・下降時の歩調はかなり急であったといえる。周知のように、この時期は黒船の来航とほぼ重なっている。その米価への影響については、のちに触れることにしたい。第2の波動は、10月末～11月初頭の急上昇からはじまる。このときは、若干の上下動をくりかえしながら高水準を維持し、翌年2月に至り急激に水準を下げ終息した。最後の波動は、安政1年7月に頂点へ達するが、上昇・下降ともに比較的なだらかであった。嘉永6～安政1年の米価の動向は以上のようにまとめることができる。この時期区分に従がい、米価の動きと相場報知状の情報を照合しつつ、なぜそのような価格変動が生じたのか、という点を考察していくことにしよう。

### 2 米価形成の実態

#### ！ 嘉永6年1～5月：米価安定期

この時期は、米価が安定しており表面的には順調に見える。しかし、実際はそうではなかった。長期にわたり帳合米商内が立会停止状態に陥っていたのである。それは、1月4日の初相場から同月27日に及ぶものであった<sup>\*21</sup>。これは前年末の買埋と売埋が不調に終り、さらに「正銀正米取渡」制度も正米・帳合米価格の鞘開を解消するに至らなかったためと見られる<sup>\*22</sup>。その対策として、この正銀正米取渡制度が改正されたのが同月24日のことであった。当制度の趣旨は、限市時に正米・帳合米価格を一致させることにある。そのための方策として、限度枠内という制限つきで現物と代銀による決済を認めている。このときは、この量的制限を緩和することにより、その実効性の増大を図ったといえる<sup>\*23</sup>。市場はこれを受け正常化に向かったようであり、29日には「帳合見込通り立

会」となった<sup>\*24</sup>。

"嘉永 6年6～10月：高騰期

第1の波動に関してまず触れなければならないのは、既述のように黒船来航との関連と思われる。このような歴史的イベントに対し、米市場はどのように反応したであろうか。これまでなされてきた説明をみると、米価急騰と時期がほぼ一致するためか、やはり黒船来航の衝撃が米価急騰をもたらしたと一般的には認識されている。そこで、この点を相場報知状に基づき検証してみよう。

ペリーに率いられたアメリカ東インド艦隊は、嘉永 6年6月3日に日本へ来航した。その後、同月12日に琉球へ退去した。直近の相場報知状として6月3日大坂発信のものがあるが、当然のことながら来航についてなにもしてない。初出はその次の6月18日大坂発信分である。その箇所を見てみよう。

.....異船も帰国之様子江戸十四日出し相聞へ、尤久々舟間相場八不替廻米六斗二升、奥筋も上順と相聞へ正米退下候、尤入用口買取候得共、地方わり安見込黒人分買受て不悪候

翌19日大坂発信分にも、やや詳細な記述がなされている。

.....東筋異船之噂にて騒動不一方、江戸表上米五斗位うり物なし、付ては此元も引立候処、当座異国舟無何事、一脈相鎮り諸人安堵之由申来、昨朝正米下放続て不位之处、押入は変御買入有之哉、今は双方白眼合此相場二御座候、何方も炎旱作評宜相聞申候文面からして、異国船の衝撃は総体的にはかなり軽微であったとみることができる。米価急騰が見られた江戸においてさえも、その影響は瞬間的なものであった。「帰国之様子」が素直に認知されるに伴い、ほとんど消失したと見られるのである<sup>\*25</sup>。そうした状況は、18日分の「奥筋も上順と相聞へ正米退下候」や、翌日分の「当座異国舟無何事、一脈相鎮り諸人安堵之由申来」といった箇所から読み取ることができる。大坂ではなおさらである。この点は、先の図1の観察結果と一致するところである。すなわち、6月をみてもめざましい上昇はとくに見当たらない。相場報知状によると、江戸米価も来航中は上記のとおり金 1両あたり5斗に達していたが、早くも18日には6斗8升へ下落している<sup>\*26</sup>。

このように、ペリー来航は米価にさほど影響しなかった<sup>\*27</sup>。とくに大坂米価については、過大にとらえられてきたといわざるを得ない<sup>\*28</sup>。したがって、7月における大坂米価急騰の原因は、ほかに求める必要がある。

この米価騰貴がはじまったのは、正確には7月18日であった。同日、ロシア使節プチャーチンが長崎へ来航しているが、当然のことながら両者は無関係である。以後も関連を示す記述は見られない。先に確認したように、この日からわずか2ヶ月たらずのあいだに、1石あたり85匁から107匁への上昇と、その後の86匁への反落が生じたのである<sup>\*29</sup>。そのときの状況を見ることにしよう。

7月18日の記事は以下のようなものであった。

.....江戸十二日出、近国恐痛申出、日切気直り、則買注文申来、右相聞へ申候、今朝上日和長合薄注文、乍同事緩二立会候所、剛気筋買正米方休日中諸方買注文一時二相成.....

ここにあるように、12日江戸発信分の「近国恐痛申出」との凶作情報こそが米価上昇の原因であった。おそらく、この相場状以外にもいくつかの経路で情報は伝播したであろう。上昇開始が18日とやや遅れたのは、堂島米会所が例年どおり、中元前後の7月9～17日が休日であったことが大きいと思われる<sup>\*30</sup>。18日の取引再開とともに一気に買い注文が入り、よりいっそう激しさを増すこととなったのである<sup>\*31</sup>。

その後、米価上昇は8月4日まで続くことになる。その間の様子も見てみよう<sup>\*32</sup>。たとえば、これは7月23日の記述である。

……帳合問屋方買注文勝上向キ、立会正米方東海道筋播州泉州京買注文引立候所、江戸表大陰気風聞取候、帖合うり人出候得共、何分正米方手剛候故続てうり人無少、尤も東西恐痛場多相聞へ候得共、大豊作之土地無数、大旱天之年柄二奉存候……

「東海道筋播州泉州京」といった、遠隔地を含む各地から正米買い注文が入ったことがしるされている。量的にも相当なものであったのだろう。こうした動向に続報が拍車をかけることとなった。すなわち、「江戸表大陰気」で、かつ「東西恐痛場多相聞へ候得共、大豊作之土地無数」との状況下で、全体としては「大旱天之年柄」との予想が立てられているのである。そのため、価格の上昇傾向はさらに押し進められることとなった<sup>\*33</sup>。

しかし、それまでの上昇傾向は、8月5日を境に一段落することになる。5日の記事は以下のとおりである。

……帖合北在内町売注文入下向キ立会、正米方も兵庫地廻売退キ口々放候所、入用口買同断式万式千貫目、尚中融通之ため御払被仰出候え共、相場高直且京都何類弱味之風聞、殊二年印御召有之、正帖合共うり人出、日切引緩此相場二御座候……

「帖合…売注文入」あるいは「正米方も…売退キ」といった表現が見られる。価格上昇開始から約20日が経過したこの時点において、相場が落ち着きを見せてきた気配がうかがえよう。しかし、市中とその周辺地域からの売り注文と、「尚中融通之ため御払被仰出候」と払米があるなかで<sup>\*34</sup>、依然として「相場高直」が続いた。こうした市況に反して下落傾向を決定づけたのは、「年印御召」であった。「年印」とはおそらく堂島米会所年行司のことであろう。大坂町奉行所が年行司を召集したとの情報が絶大な効果を生出したようである。これで「正帖合共うり人出」となった。続けて6日の部分も見てみよう。

……此元正米競かい又八他所抜積不相成、尤奉相場引立候て八、小前之者難儀二及旨御触書有之二付、年行司 激敷申渡有之……

大坂町奉行所が米価高騰への対策にのりだしたことがわかる。速報性に重点をおく相場報知状では、その詳細は十分明らかではない。しかし、『堂島旧記』によると、8月5日に米価引上抑制令が言渡されている。その際には、「小前之者難儀」を考慮し他所他国への売りさばきを禁じている。さらに、小売商に対しても一定の価格抑制政策をとったことが判明する<sup>\*35</sup>。こうした大坂町奉行所から米市場関係者への働きかけが効を奏し、価格上昇に歯止めがかけられたのである。いずれにおいても、売りと買いが拮抗状態にあったことがわかる。

こののち、米価はごく短い期間ではあるが安定した。図1に見られたように、8月下旬まで100匁あたりを上下する程度である。両時点ほぼ中頃の8月14日と20日の状況は、次に見

るとおりである。

8月14日

.....此元年印御召高下二不抱候由、正帖合上向キ立会候処、灘より注文入候得とも、北在注文買、正米方播州兵庫売退キ注文候処、当用口買進、乍去帖合目先気うり、尤放生会無難之姿相見へ候得共、正米陸陸一方追々如何可參哉.....

同月20日

.....此元帖合年行司御召之風聞、殊二北在地方うり注文入下放立会、併正米方当用口かい上約候、尤、もの無之帖合剛氣路売引取、乍去正米高キ八気つかへ帖合目先うり小緩、何様一兩日双方力保合取組多、追々面白キ高下御座候.....

14日にも大坂町奉行所への米方年行司召集があったようである。だが、米価へさほどの影響は見られなかった。正米に対してはまだ上昇の期待がうかがえるものの、予測困難であったようである。それは、末尾の「追々如何可參哉」によくあらわれている。20日にはふたたび年行司召集の噂が流れたようである。しかし、この日も「双方力保合」の状況で、「追々面白キ高下御座候」といわざるを得ないような、小幅の上下に終始していた。

8月下旬に入ると、米価は下落しはじめる。それまでの100匁前後が、90匁を割込むことになったのである。その間、同月25日に95匁まで、9月1日には89匁2分まで低下している。1ヶ月近くのあいだ100匁を上下していた米価が、わずか10日たらずで10%以上の下げ幅を示すことになった<sup>\*36</sup>。

こうした動きの背後には、次のような事情があった。8月22日の相場報知状には「東筋豊作之由」とあるように、7月時点の凶作の予想は見込みちがいであることが判明しつつあった。8月27日の状況は以下のとおりである。

.....此元帖合跡建、正路繫米致候様、昨夕刻年行司へ被申渡、今朝播州地方北在うり注文二候処、船津注文口買見込 直二相始り、正米同事かい進候得共、摂内新米入札人気穩.....

これまでと同じく、ふたたび大坂町奉行所から米方年行司へ綱紀肅正の要請があったことと、新穀の入札が報じられている。これらの効果を峻別するのは困難だが、需給の逼迫がある程度緩和されたことは間違いないだろう。

その後、9月12日には、こうした動向を決定づける情報もたらされた。

.....此元御停止も余程為寛被 仰出先以隠気、殊二帖合兵庫買注文無之、当用商内のみ帖合目先買人気いら付候得とも、立直り八問屋方注文口うり、尤北在上作反二付三石余も取入之由一体人気穩此相庭二御座候.....

依然として相場は不安定ではある。しかし、豊作は「東筋」だけでなく大坂周辺地域もそうであることが確定的となってきた。7月における作況予測は誤りであった。それを大幅に上方修正する必要が生じてきたのである。以後、図1に示されているように、9～10月においてほぼこの水準が保たれることになった。

端境期において、米価はこうした極端な動きをみせた。以上の市況は、黒船来航とまったく無関係であった。この年の豊凶については、「本年は早魃の爲め諸国豊凶不同、概して豊年なりし」との評言もある<sup>\*37</sup>。とくに、豊凶の地域差が大きかったことが災いとな

った。このことが全体水準把握を困難なものとしたため、米価をよりいっそう乱高下させたのである。したがって、結果として誤った作況予測が流布し、それに市場が攪乱されていたのである。そして、大坂町奉行による市場介入が価格を急転させることともなった。

以上のような過程を経て、市場取引は10月8日に限市を迎えることができた。取引は、建物米を加賀米から筑前米へ変更し10月17日から再開されるはずであった。しかしながら、新たな問題が待構えていた。その初日から11月3日までの間、帳合米取引が停止となったのである。

その間の事情は、17日分の記事に示されている。

.....筑前米不着二付、今日帖合立会不申候、正米方売買窮屈無之様被仰渡候得共、未だ新舟入込薄之故、新古とも口用商内而已、前日不相替なから、諸蔵為御登方多少案事人氣抑二御座候.....

建物米である筑前米をはじめとして、新穀供給が遅れていた。このことが響き、立会不能の状態となったのである。こうした事態を予測していた節もうかがえる。というのも、17日の初日を控えた12日において、おそらくは大坂町奉行から不正米仲買召し捕らえの事実が公表されているからである。それとともに、「平準二相庭相立て、正路之売買致候様」との要請が出された<sup>\*38</sup>。ただし、これには気象条件の悪さもかなり作用していたようであった。そのことは、22日の「此元今朝札もの多候得共、昨日 西風二相成候故、入舟有之見込人氣穩」や、24日の「此元昨札味宜敷候得共、西風二而追々入津、今朝人氣穩」といった記述から知ることができる。西風によって廻船が入津しはじめたのである。肝心の筑前新米については、11月1日の時点では、依然として「筑前米も今以入札無之」ということであった。その後ようやく廻着されたようである。3日には「此元筑前米、今日入札有之、帖合明日 本舞台立会申」ということで取引は一応実施の運びとなっている。

#嘉永 6年11月～安政 1年2月：高騰期

第2の波動は、取引開始間もない11月13日にはじまった。米価は、7日ほどで90匁から110匁近くと20%以上上昇した<sup>\*39</sup>。その後、年末・年始をはさんだこともあり、11月下旬以降1月中旬にかけては、小さな波動を含みつつ微弱な変動に終始した。1月19日以降はおよそ下落傾向にあり、4月には92～94匁まで下がった。

11月11日になされた大坂町奉行の仰渡からすると、価格上昇と時を同じくして新穀廻送が遅れていたようである<sup>\*40</sup>。帳合米の長期取引停止をひきおこした廻米不足は、まだ完全には解消されていなかったのである。このため、豊作は判明ずみにもかかわらず、需給が逼迫の度合いを強めてきたのであろう。

さらに、11月14日の相場状においては、それ以外の要因を読み取ることができる。

.....此元御手当米貳万石之内、壹万石は御かい入相済、残り壹万石八、納屋物又八蔵米兩条之内にて、追々御かい入可相成段御申渡御座候.....

詳細は明らかではないが、大量の買い上げがあったことは間違いない。すでに購入ずみの1万石に加え、さらに1万石の調達が明言されたのであった。対象が必ずしも蔵米に限定されていないところを見ると、質よりも量が優先されたと見ることができよう。この突然の大量需要が、廻米遅延による過少在庫とあいまって急騰をもたらしたのである。



さらに4日後の18日には、「諸蔵御売方不多風聞」とある。さらに不測の事態が続いたのである。つまり、大坂廻米は時期的な遅れだけでなく、量的にも不十分であるとの認識が追加されることになった。

こうして上昇した米価は、1月中旬まで下がらなかった。この時期に廻着した加賀藩の登米量に関する情報もその一因であろう。すなわち、毎年4月以降に廻着する同藩大坂登米が、当年はわずか5万石にとどまると藩当局から通知されたのである<sup>\*41</sup>。この数字は、弘化2(1842)年の7万5,000石、嘉永1(1848)・同4(1851)の7万3,000石・10万5,000石とくらべるとやはり低い<sup>\*42</sup>。1月下旬以降になって、多少高下しつつ緩やかに下落するようになる。その傾向が明確になったのは2月上旬であった。

まず、2月2日に「惣会処、御下之風聞」があったことがしるされている。ふたたび「風聞」が相場を高下させることになったのである。長期にわたる高米価ゆえ、天満・北・南の三郷にある総会所から施行米が放出されるとの予想がおのずと立てられたのであろう。ただし、それが実行に移されたことを示す記述は見当たらない。このときは実現は見なかったようである。ほかに2月11日の記事にある、次の事柄も米価引き下げに貢献するところが大きかったと思われる。

.....此元夜前、年行司 筑前米五万俵余追打寄御払米有之段御申渡有之、依て気筋連、正帳共存外下放.....

筑前米が大量に売却される、と年行司が伝えたのであった。筑前米は堂島の重要銘柄である。いわゆる四蔵米の一角を占めると同時に、この時点での建物米でもある。よって、その大量売却が通達されれば、価格の大幅下落は必至となる。このときは入札が実際に行われた。同月の筑前米入札状況をみると、14・19・21日の3日間において、それぞれ12,900・15,600・10,500俵が売却されている<sup>\*43</sup>。それに伴ない、価格は2月初旬においては105匁を超えていたのが、2月21日には95匁を割り込むに至っている。さらに引き下げ要因が追加された。3月5日分をみると、2万石の加賀米が廻送中であることと、ほかに古米1万俵が売却を予定されていると報じられている。こうしたこともあってか、相場の動きはかなりの落ち着きをみせている<sup>\*44</sup>。

\$安政1年 3~8月：高騰期

最後の波動は、安政1年下半期をおおうもので、もっとも長期にわたる。大坂米価は、6月下旬~7月下旬において、97匁から107匁へと10匁あまり上昇した。その後5ヶ月以上にわたって緩やかな下落をかなりの期間続けた。その結果、年末には80匁まで下がることになった<sup>\*45</sup>。こうした米価の推移は、通常の季節変動に沿った動きかもしれない<sup>\*46</sup>。これまでとくらべ歩調がかなり緩慢であるから、これといった決定的要因は見出しにくい。このように波乱の少ない中、いくつかの目をひく記述事項を指摘しておくことにしよう<sup>\*47</sup>。

これは、7月2日分の記述である。

.....正米方江州張尾かい注文数口入込、ようやくかい上放候処、黒人筋うり帳合黒人うり押へ、乍去眼前悪性日和、法界之人気.....

また、おそらくその翌日のものと推測されるが、そこにも「正米尾州三州仕立かい注文入、引直り候」との記述が見られる<sup>\*48</sup>。これらの買い注文がどれほどの規模であったかは不

明だが、悪天候の情報が流れる中で価格を押し上げる結果となったのであろう。

7月末以降、価格の動向は反転する。7月28日の部分をみよう。

……此元地方うり注文手筋うり緩々、立会正米方不相変候処、上筋うり退キ注文入、殊ニヒ後米四万俵御払有之様子、うり人出引下ケ、尚帖合弱気筋うり候……

「ヒ後米四万俵御払」、すなわち大量の肥後米売却の風聞の影響である。本来なら新穀供給期になされるはずの肥後米売却が、端境期にまでずれこんでいる。これが低下傾向を加速させたのであった。ただし、相場報知状では現実に入札が行われたかどうかは定かではない。

米価の引き下げ要因は他にもあった。この年は前年にくらべ早くから豊作の予想が立てられていたことである。たとえば、7月29日の「無類之上日和」をはじめとして、好天の情報がたびたび伝えられている。こうした中、相場回復は難しいとの気配が市場には広まってきている。価格下落による損銀を見切ろうという動きも出てきている。それは、閏7月25日着信分における「内町上筋江州備前、投げ注文相嵩み」との箇所からもうかがえる。この「投げ注文」について、嘉永ごろの相場手引書「正空売買聞書」は「買付有之節、相場下落いたし、損銀見限、米一盃にするをいふ」と説明する<sup>\*49</sup>。市場はまさにこうした局面に立至っていたといえよう。さらに、8月11日の「九州庭上々作之由、正帳共戻りうり多」との文言にも市場の空気があらわれている。こうした気配へのもう一段の見切りがあったのか、同日の相場状には「備前紀州投注文口手筋うり、誠ニ昨夕気先下放」ともしている。その後8~9月ごろに若干の上昇が見られるが、10月以降の新穀供給とともに解消した。

おわりに

最後に、以上の検討によって明らかとなった点をまとめておくことにしよう。

ひとつは、相場報知状を通じた緊密な情報流通網があったことである。この時期は大坂米市場の退潮期であったから、おそらく以前から相当に高度な水準に達していたと推測される。各地の情報の収集・分散が、大坂を結節点としてなされていた。したがって、大坂市場をとらえるにあたっては、単に商品市場としてだけでなく、情報流通の中心として見る必要がある。

しかしながら、大坂問屋商人の商圈は幕末期において、おびやかされていた。この点に関し、物価安定化が重要課題であった。とくに、大坂米価の動揺は、遠隔地との間で商品の集散を行う中央市場大坂にとって大きな負担となったといえる。

大坂米価の形成に対して、諸藩登米が大きな影響力をもった。とりわけ新穀供給期において、諸藩蔵米廻米の遅速と多寡は米価を著しく動揺させた。いずれも、諸藩が各地相場をにらみつつ登米を実施したためであろう。すなわち、大坂米市場が絶対的な集荷力もはや有していないことが、価格変動を増幅させたのである。さらに、作況情報も相当の影響力をもって作用した。これも、廻米量の水準が低下していた当時、登米の関連情報が市場のより敏感な反応を呼び起こしたと推測される。

そのなかで、大坂町奉行所による米価政策は一定の効果をもった。たとえば、他所他国積抑制・買上米・施行米などである。いずれも、必ずしもその実施を要するものではない。米方年行司が大坂町奉行所に召集されるか、あるいはその噂だけでも市況を左右するだけの力を備えていた。こうした政策当局による介入は、飯米を確保するため不可欠である\*50。しかし、それが効果的であるだけに、相場の攪乱要因とならざるをえない、という矛盾した側面をもっていたのである。

最後に付言しておきたいことは、黒船来航の衝撃についてである。本論文での評価は従来の見解と必ずしも一致するものではない。米市場の動向を通じ得られた検討結果によると、その波紋はごく軽微なものにとどまり、とくに大坂米市場ではその影響はほぼ皆無であったのである。

### 【注】

\*1 本論文は、加藤慶一郎「大坂米価の短期変動について - 嘉永 6・安政元年の相場報知状を素材に -」（『国民経済雑誌』第 179 巻第 3 号、1999 年）をもとに、その後の研究成果を加え改稿したものである。

\*2 新保博『近世の物価と経済発展 - 前工業化社会への数量的接近 -』（東洋経済新報社、1978 年）45-49 頁。

\*3 これは、周知のように、大坂町奉行阿部正蔵がまとめさせた大坂入津商品に関する調査報告書である。これまで、主として大坂市場の衰退、つまり幕藩制的市場構造の変動要因追究に利用されてきた。しかし、本報告書に全面的に依拠することには慎重であらねばならない。こうした点については、脇田修『日本近世都市史の研究』（東京大学出版会、1994 年）253-60 頁を参照。

\*4 以下のようにしるされている。

大坂表之儀は、諸国取引融通専一之場所は、諸国相場之元方二付、売買筋多端二而、迎も難尽筆紙意味も有之候得共、所詮之处八、近年之時勢を見込、貪利奸計之族増長仕、先前之姿取崩候義不少候二付、諸色之員数は古今相替候義無之候得共、不融通故高価二至候趣二相聞候二付、何れ二も旧来之取引振二相復は、精々世話仕は、居り合候二随ひ、諸国融通立直、平準之直段二可相成は、申迄も無御座は

……

（『大阪市史 第五』清文堂、1979 年復刻版発行、639 頁）

\*5 『米商旧記（下）』（大阪経済史料集成刊行委員会編『大阪経済史料集成』第 4 巻、大阪商工会議所、1973 年）33 頁。

\*6 『米商旧記（下）』33-361 頁。

\*7 これら両側面のもつ矛盾については、本城正徳『幕藩制社会の展開と米穀市場』（大阪大学出版会、1994 年）第 7 章において精緻な分析がなされている。ここであげた価格安定化の要請は、こうした矛盾を回避する意図もあったと思われる。また、近世の都市政策史研究を進めるうえで、都市飯米流通の側面を組込むことの必要性は、岩田浩太郎「都市経済と騒擾」（都市史研究会編『年報都市史研究』第 3 号、1995 年）44 頁で

主張されている。

\*8 先述のとおり、こうした要請は数多くなされているが、1例のみあげておくことにしよう。万延1(1860)年11月11日における大坂町奉行所から米方年行司への仰渡において、次のように述べられている。

正・帳(正米・帳合米:引用者注)共平準之相場相立候様可致掛引、左候八、追々他所気請も宜、手広之商ひも出来、市場繁栄之基二有之候.....

(『米商旧記(下)』280頁)

\*9 当時、堂島帳合米商内の価格保険機能は大幅に低下していた。兩年の1~4月、5月~10月、10月~12月における正米・帳合米相関係数も、 $-0.891 \cdot 0.535 \cdot 1.000$ と $0.948 \cdot 0.858 \cdot 0.591$ とやはり低水準にあった。

\*10 金銀銭相場の情報については、三井高雄『新稿両替年代記關鍵 卷二孝証篇』(柏書房、1971年)219-23頁に説明がある。近世における商業情報の流通については、高部淑子「北前船の情報世界」(斎藤善之編『新しい近世史 第3巻』、新人物往来社、1996年)などを参照。本論文では、幕末から明治前期における北前船の商業情報伝達・流通制度が明らかにされている。なお、「相場報知状」の呼称は、岩橋勝『近世日本物価史の研究』(大原新生社、1981年)147頁に従った。

\*11 広島県立文書館所蔵『橋本吉兵衛家文書』。

\*12 『新修尾道市史 第5巻』、230-231頁。当家の嘉永5(1852)年から元治1(1864)年の「雲州御米仕切帳」(ただし安政5年欠)によると、尾道での払米高は平均約6,000石にのぼった。しかし、その量は1,575~9,514石と流動的であった。相場報知状の利用価値が高かったことが推察される。ちなみに、嘉永6年の「廻米方諸雑費仕出帳」という表題をもつ廻米関係帳簿のなかに、相場報知状入手費用が計上されている。これによると、同年7月14日の時点で62通で193匁、すなわち1通1匁5分であった(『橋本吉兵衛家文書』)。

\*13 ここでは、相場報知状の日付は基本的に大坂発信日をとっている。なお、引用部分末尾の「子二月四日」(嘉永5年)は誤りである。米価をはじめとする記載内容からして、「丑二月四日」(嘉永6年)が正しい。

\*14 「難波の春」(島本得一編『堂島米会所文献集』所書店、1970年)13頁。

\*15 ここには過去のデータがあげられることもあった。たとえば、安政1年6月13日に近畿地方が地震に見舞われた際、同15日大坂発信相場報知状には、35年さかのぼった文政2(1819)年6月12日地震当日の米価が掲載されている。これは、季節が同じであるため、参考資料として掲出したと見てよいだろう。このことからすると、情報発信者において、データの蓄積がかなりあったとみられる。

\*16 以下に、堂島正米・帳合米商内に取引注文をよせた地方をあげるが、これらは相場を左右するほどの勢力であったがゆえその名が相場報知状に上がったのであり、言及されない地方の顧客も他にいたと思われる。なお、それぞれの呼称は史料上の表記に従っている。大坂以東においては以下の各地であった。南都、京、城州、大津、江州、越前、伊賀、勢州四日市、美濃、尾州、尾張大手来客、三州、遠州、駿州、東海道筋、

東筋、江戸表。大坂以西においては、以下のとおりであった。北在、伊丹、池田、丹波、灘、兵庫、播州、堺、泉州、河内、和州、紀州、四国路、備前、備中、尾道。他に「因州来客」と表記された取引参加者もいた。

- \*17 状屋について、天保末の著作と推定される「稲の穂」には「国々米商内して居り懸合浜始め米懸りの向きへ日々正米帳合米の直段並蔵々売りもの出来高、其余浜方の気配は元より、他所他国より申来る事を聞合して申し遣す、惣て米商内一切の事を書認めて、書状して渡世するにより状屋といふ」、とするされている（島本編『堂島米会所文献集』16頁）。また、相場通信には飛脚問屋がかかわっていた。この点については、藤村潤一郎「情報伝達者・飛脚の活動」（丸山雍成編『日本の近代<sup>6</sup>情報と交通』中央公論社、1992年）344-345頁を参照。
- \*18 「商家秘録」（『通俗経済文庫』第8巻、日本経済叢書刊行会、1917年）277-279頁、鈴木直二『徳川時代の米穀配給組織』（巖松堂書店、1938年）第47図「堂島米市場休誌表」、「繁花風土記」（大阪経済史料集成刊行委員会編『大阪経済史料集成』第11巻、大阪商工会議所、1977年）187-188頁。
- \*19 これらのいずれにおいても、米会所が所在した。堺を除きここでは堂島米会所と同じく先物の取引が確認できる（鈴木『徳川時代の米穀配給組織』628-655頁、加藤慶一郎「近世中後期大坂における米穀流通機能の変質過程 - 堂島帳合米商内のヘッジ機能を中心にして -」（『社会経済史学』第58巻第2号、1992年）70-71頁を参照。
- \*20 価格情報はこの史料からも採取可能だが、より多くえられる鈴木直二『大阪に於ける幕末米価変動史』（国書刊行会、1977年）136-148、150-165頁によった。両史料の嘉永6年1~3月における33の同日価格を比較すると、誤差は0.02%であった。
- \*21 鈴木『幕末米価変動史』135-136頁。
- \*22 このとき米仲買から米方年行司へ提出された願書には、前年末の状況について以下のような説明がなされている。
- .....終二限日二至り正帳一和不成、鞞開二而、限商内と唱、正米正銀之切手取渡之作法、直合二而失墜何程と積り、双方カラ入、世間之見聞も不憚、市場二而喧嘩口論杯致、売捨買居二相果候事、不作法之致方、言語同断之成行、扨々苦々敷儀二御座候.....
- （『米商旧記（下）』195頁）
- \*23 正米取渡高は、清算勘定を担当する米方両替1軒を単位に定められていた。寛政期においては、1軒あたり400石で、米方両替は12軒であった。よって、計4,800石が可能であった。しかし、この時期までにわずか4軒に減少したため、それは1,200石となっていたのである。対応策として、1軒あたり800石・計3,200石と枠を広げることとしたのである（『米商旧記（下）』194-198頁）。なお、この時期の米方両替は、鶉屋善助・米屋三右衛門・豊嶋屋安五郎・難波屋たき、の4名であった（中川すがね「大坂本両替中間のデータベース作成に関する基礎的研究」『甲子園大学紀要 人間文化学部編』3（C）、2000年、33-56頁）。
- \*24 同日発信分の相場報知状による。以下、とくに注記のない場合はすべて相場報知状

からの引用である。

- \*25 こうした江戸市中の様子は、『武江年表』によっても知ることができる。  
江府の貴賤、始めには仔細を弁ぜずして恐怖して寝食を安んぜず、老人婦幼をして郊外遠陬に退かしめしもありしが、平穩にして不為に属し、諸人安堵の思ひをなせり  
(金子光晴校訂『増訂武江年表 2』平凡社、1968年、135頁)
- \*26 26日大阪発信の相場報知状による。
- \*27 山口宗之「ペリー来航時『騷擾』の再吟味」(『歴史学・地理学年報(九州大学教養部)』第9号、1985年)65-85頁には、黒船来航それ自体よりも、6月9~11日における江戸湾測量作業時に強行された艦隊の侵入行為こそがより大きな混乱をひきおこしたとの見解が示されている。
- \*28 たとえば、『大阪市史』第二、742頁、鈴木直二『増補・江戸における米取引』(柏書房、1965年)172頁などの記述に見ることができる。
- \*29 鈴木『幕末米価変動史』142-143頁。
- \*30 「商家秘録」278頁、鈴木『徳川時代の米穀配給組織』第47図「堂島米市場休誌表」、「繁花風土記」188頁。それぞれの刊行は、弘化2年、文政10年、文化11年である。「商家秘録」と「繁花風土記」では17日より取引開始となっている。
- \*31 ただし、帳合米商内は例年5月から8月中旬までは、休日でも取引を行うことになっていた(「考定稲の穂」8頁)。
- \*32 将軍家慶死去により、7月27日から8月1日まで諸商売が停止された(『大阪市史』第四下、2059-2066頁)。これに関して、相場報知状には次のような記述がなされているのみである。「此元格別ニて御穩便中ニ候得共、今日 正帖とも午刻迄物静ニ立会候様被仰出」。米価に対して格別の影響はなかったと推測される。
- \*33 行政当局の状況把握が妥当性を欠いていたことは、大坂町奉行所から7月27日にだされた以下の口達にもみることができる。  
此節長崎表へ異国船渡来致シ、尤別状筋更ニ無之趣ニ候を、其儀八勿論、最前相州浦賀へ渡来之異国船、速ニ退帆致候義ニ品ヲ付、浮説申触候者有之由、就而八右ニ被惑、時合ヲも不顧、夫々名目を付、米穀其外金銀諸品杯専ラ買置候儀心掛ケ候者も不少、自然融通ニも抱り候哉ニ相聞へ、以之外之事ニ候.....  
(『米商旧記(下)』205頁)
- ここでは、「浮説申触候者」をやり玉をあげるにとどまっているのである。
- \*34 「尚中融通」とは、「市中融通」を灰屋において誤写した可能性があるが、いずれにしても需給の逼迫緩和のため行政指導があったとみてよい。
- \*35 その全文は以下のとおりである。

#### 御申渡

当年作柄之儀、豊凶未不相定、当地有米之義平年通ニ而、新穀取入迄有余も有之候処、追々米相庭引上ケ候趣ニ相聞、如何ニ候、右ニ付而八自ラ人氣買持候方ニ相傾、且搦米屋・駄売屋共之内ニ八、一己ノ利欲耽り、日々之小売・駄売等目当之外、余分之石

数買入、内々二而他所他国へ売捌、徳用取候哉之趣も相聞、以之外之事二候、右体之取計増長致候而八、土地之有米追々相減、弥直段引立候而已ならず、小前末々之者共可致難儀候条、其筋渡世二携り候者共、当地之米融通を専一二心掛ケ、日用売捌方目当之外、余分之米買八不及申、内々他処他国へ売捌候義、決而致間敷、自然右体之者有之二おゐて八、吟味之上急度可令沙汰候、尤搗米屋共小売米之儀も、元付之割合ヲ以一己之利欲を離れ、成丈ケ下直ニ売渡候様可致候

(『米商旧記(下)』206頁)

冒頭の「当年作柄之儀、豊凶未不相定……追々米相庭引上ケ候趣二相聞、如何二候」という、当局が不審に感じるほどの市場の敏感な反応ぶりは、大坂登米量減少にともなう需給の構造的逼迫があったためであろう。

\*36 鈴木『幕末米価変動史』142-143頁。

\*37 鈴木『江戸における米取引の研究』172頁。

\*38 『米商旧記(下)』206-207頁。

\*39 その直前の11月5日において、大坂町奉行から三郷富商へ上納金納付の勧告がなされた。その後11月と12月に再度督促がなされている(宮本又次監修『毎日放送文化叢書 5 大坂の商業と金融』毎日放送、1973年、352頁)。しかし、相場状においてこの件に関する記述は見出せない。

\*40 具体的には、次のようなものであった。

当丑年夏以来稀成早魃二而、場所二より豊凶甚々不同有之候と八乍申、止る処相應之作柄之由相聞へ候へ共、国々廻米手後れ、諸家新米も延着等二而、未例年程ニ八米高多払出も無之

(『米商旧記(下)』207頁)

\*41 加賀藩蔵米は、端境期の大坂米市場の動向を左右した。その供給量は、例年1月10日までに通知する慣行があった(「難波の春」15頁)。また、同藩登米量が帳合米商内の価格保険機能にあたる影響については、加藤「近世中後期大坂における米穀流通機能の変質過程」73-76頁を参照。

\*42 本城『幕藩制社会の展開と米穀市場』340頁、表6-10。

\*43 2月17、21、24日の相場報知状による。

\*44 この時期にも外国船情報はいくつか見られた。しかし、「異船噂取 〃 乍穩」(2月2日)、「異船内海へ入込候得共穩」(2月11日尾道着信)としかない。これらは、ペリー艦隊の1月27日の江戸湾進航をさすものと思われるが、やはり米価引き上げ要因とはみなしがたい。

\*45 鈴木『幕末米価変動史』157-165頁。

\*46 宮本『近世日本の市場経済』(有斐閣、1988年)302-307頁において算出された米価の季節指数によれば、米価は毎年7~9月の間に頂点に達したのち、12月~翌年2月にかけて低下する傾向をもっていた。

\*47 先に述べたように、安政1年の相場報知状は8月までしか残存していない。よって、本論文での分析は一応ここまでにとどめることにしたい。

- \*48 日付の記載はないが、着信日は7月7日で先のものと同日である。
- \*49 島本編『堂島米会所文献集』5頁。
- \*50 注7を参照。

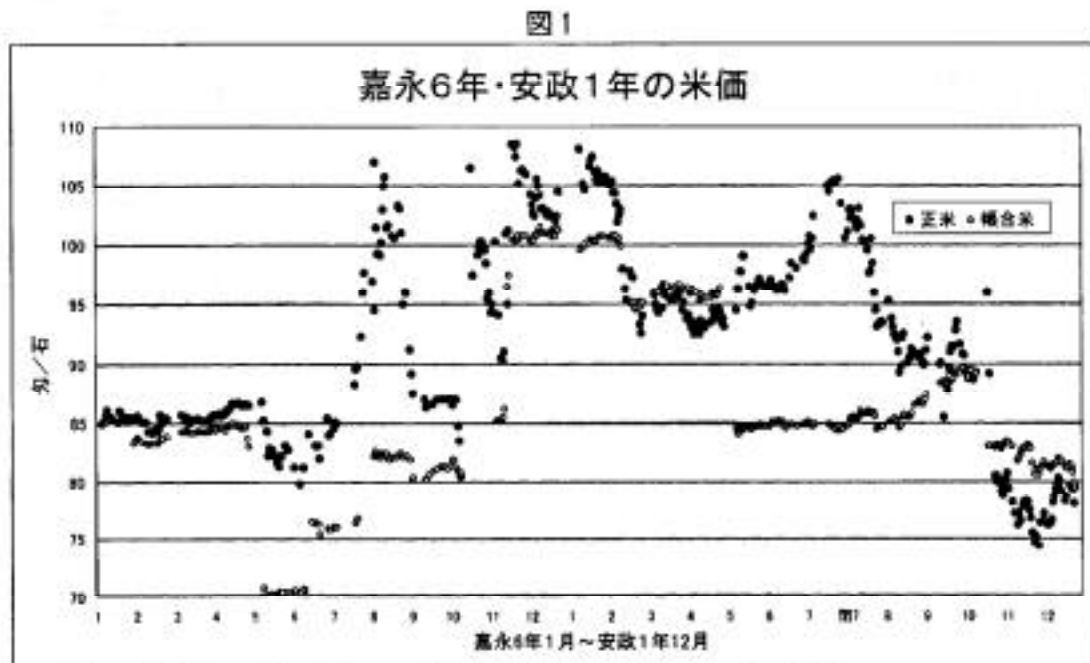


表1 相場報知状発進と各地米価記載の状況

1 嘉永6年									
月	発信数	江戸	大津	京	伏見	堺	兵庫	下関	その他
1	4	3	3	4	0	2	3	2	
2	17	8	15	16	0	16	12	1	尾張1、備前1
3	21	9	19	17	0	8	19	0	金沢1
4	9	2	9	8	0	7	9	0	
5	3	2	3	2	0	2	3	0	金沢1
6	4	3	3	1	0	0	2	1	
7	5	2	1	2	0	1	2	0	金沢1、美濃1
8	17	8	9	0	0	0	12	3	金沢1、美濃1、桑名1
9	9	4	7	0	0	0	5	1	金沢1、美濃1、備中1
10	14	8	13	0	1	2	12	4	金沢2、駿河・遠江・播磨・肥前各1
11	10	4	6	0	3	3	4	2	尾張1、勢州津1
12	11	7	9	0	2	2	5	1	金沢3
合計	124	60	97	50	6	43	88	15	
2 安政1年									
月	発信数	江戸	大津	京	伏見	堺	兵庫	下関	その他
1	3	2	2	0	0	0	1	0	
2	14	10	13	1	2	3	13	1	
3	9	6	8	0	5	5	7	1	尾張1
4	9	5	8	0	1	1	8	2	美濃1、不詳1
5	3	2	2	0	0	0	3	1	
6	4	2	4	0	0	1	2	0	庄内1、不詳1
7	4	1	4	0	0	0	3	1	越後1、越前1
閏7	12	6	11	0	0	0	11	1	美濃1、越後三条1、奥州1、不詳1
8	2	0	2	0	0	0	2	0	
合計	60	34	54	1	8	10	50	7	

出所) 本文参照。